

時空をこえて

コンピュータネットワーク社会へ向けて

株式会社吉田製作所
取締役社長

山中 通三



ある朝

コーヒーの香りに刺激されてまどろみから醒めたばかりで、ぼんやりしている頭を抱えながらベッドの端に暫く腰を掛けていた。明け方、肌寒さを感じて目を醒まし、部屋の隅に備え付けられた小さなキッチンでコーヒーマーカーのスイッチを入れ、そのままウトウトしてしまったのだった。2週間ほど前、パリに着いたときはまだ夏の日差しであったのにもと思いながら、日本から別便で送った荷物の中に薄手のコートを入れておいたことが頭の中をよぎった。ベッドの脇の床に直接おかれたパソコンの電源を入れ、コンピュータウイルスの感染チェックソフトが働いている間にシャワーを浴びて着替えた。コーヒークップを片手にパソコンを操り、電子メールをチェックする。36本の電子メールを受け取り、その中から重要度の高そうなものから目を通してゆく。残りはオフィスに出勤してからでも遅くはない。まず日本からの応援人員の派遣を、いつから行くかを問い合わせてきている電子メールに返事を書く。3カ月は必要と思われた新製品開発の引継業務は、事前に電子メールで逐次連絡を取り合ったおかげで、2週間経過した段階で早くも終盤に差し掛かるころであった。パリ近郊に所在するベンチャービジネスと協同開発中の新製品の基本ソフト、ハードの技術的引継は予想以上にスムーズにゆき、あとは実際に製造する上でのノウハウの引継ぎを待つばかりであった。そのための技術者の応援派遣を本

社に依頼していたのだ。次にインドネシアに拠点を置く取引先からの技術的質問事項に回答し、さらにアメリカのミルウォーキーに本社を置く精密部品の購入先からの電子メールに返事を書く。最後に今年中学に入学したばかりの長男からの電子メールを読む。複雑な心境だ。日本にいる時よりコミュニケーションが増えている。返事を書くのはいつものように1日の仕事から帰って、寝る前の楽しみに取っておこう……。

以上は社員の日常を物語風に記したものです。私が電子メールを使い始めたのは阪神大震災の直前でした。最初の頃は「電子ファックス」程度の認識しかありませんでしたが、震災の状況が多方面から逐一送られてくるのを見て、認識をガラリと改めました。神戸へ応援に行った先発隊が後発隊に対して、交通の便や町の様子を報告を数時間ごとに送ってくるのを見て、私も瓦礫の街と化した神戸に身を置いているかのごとく感じたものです。これを境に電子メールの有効性が社内的に認識され急速に普及していきました。電話でのやりとりが減り、あの時に言った言わないのトラブルがなくなるという効果の以前に、電話で相手を捜す煩わしさや、そのとき相手が不在であったが故に、注意しようと思っていた気持が萎えてしまう、ということがなくなりました。電子メールでも叱咤激励は可能なのです。日本語の特性として話し言葉にも書き言葉にも、ある種の曖昧さがありますが、送った電子メールへの思わぬりアクション

を経験するに従って、曖昧な表現をすることも減ってきたように思います。逆に困った点は、ノート型のパソコンを使えば、それこそ世界中どこにいても交信可能なので、海外出張中でも会社で何が起こっているのか気にせざるを得なくなった点です。以前には海外に出たら、あとは日本にいるスタッフに任せて、自分は海外での仕事に神経を集中すれば済んだのが、つつい気になってパソコンをいじってしまいます。たまに通信事情の悪い都市へ出かけて交信不能となると、はじめはイライラしますが、交信をあきらめてしまうと妙に気が休まったりします。

時間・空間・社会の見直し

バブル期の大都市で地価が大幅に上昇している最中に、在宅勤務とかサテライト・オフィスという言葉をよく聞きました。このときはオフィス不足を解消する手段として編み出されたものでしたが、最近ではコンピュータネットワークの発達のおかげで、社内にいながら「在宅勤務」同然の人が増えているのではないのでしょうか。すなわち会社へ来ても1日中コンピュータの前に座り、資料を作ったり、電子メールをやり取りしている人であれば、家にコンピュータと電話回線があれば会社へ来てやっているのと同等の仕事ができます。1日おき、または週に2日間でも在宅勤務の日とすれば満員電車も少しは緩和され、本人の肉体的消耗も軽減されます。さらに空間的制約からの解放だけではなく、緊急の要件でない場合は電子メールで好きな時間に連絡を取ることができます。

考えてみれば、現代人は時間に追われるというより時間のリズムに追われて生活している、といえるのではないのでしょうか。朝、目が醒めたら朝食をとり会社へ追い立てられるように出勤し、ほどほどに残業をして帰宅するという生活パターンを強いられています。これからは、「夜」目が醒めたらおもむろにパソコンの電源を入れ、夜食を食

べながら勤務する人が出てくるでしょう。コンピュータネットワークの先進国アメリカでは、電子会議システムの導入で50%以上も会議時間を節約した会社の事例が発表されています。私の経験としても事前に電子メールにより問題点を絞っておくと、実際の会議のときに話がわき道へそれることが減り、さらに会議参加者の情報レベルを同一にするための時間が節約されるぶんだけ会議時間が短縮されます。

これからますます発達するであろうコンピュータネットワークは、まさに人々から時間と空間の壁を取り除くといっても過言ではないでしょう。しかしながら同時に色々な社会的歪みをも生んでゆくものと思われます。直接的に他人と話すのが苦手な人はコンピュータを介することでその苦痛が軽減される一方、ますます他人との直接的会話、触れ合いの機会から遠ざかります。仕事、教育、公共サービス、消費、メディア、さらにはギャンブルまでもがコンピュータネットワークに組み入れられるようになれば、不都合が発生したときの影響がとてつもなく大きくなります。発生しうる犯罪の被害は世界規模で広がることが予想されます。また実際にどこかへ生身の体が忍び込むのと違って、ネットワークへの不法侵入は罪悪感が少ないのではと危惧されます。在宅勤務や在宅教室の普及は従来の生活環境だけでなく、社会常識をも覆すものになることが予想されます。

コンピュータネットワークは間違いなく急速に普及し、第2の産業革命というより「新しい文明の出現」と呼んだ方がふさわしい時代が間もなく到来します。人々は時空をこえた生活環境を手に入れることができます。そして、それに伴う混乱も社会問題化するでしょう。しかしそれらを最小限にくい止めつつ、速やかにそして健やかに科学の進歩を謳歌できるように、社会基盤の整備や、常識や社会通念、さらに因習の見直しまでもリードすることが現在に生きる政治家、経営者、そして各個人に求められています。